冷たい夜風が私の肌を撫でる。儀式用に着替えたこの白い衣装は生地が薄くて露出が多い。だから余計に寒く感じてしまう。

緑葉によって遮られた夜空に浮かぶのは、紫色の光を放つ満月。そこから視線を下に動かすと、ぴんと張った泉の水面にもう一つのお月様があった。

履物を脱いだ私は、そっと目の前の泉に足を入れる。膝程の深さの水が想像以上に冷たくて、耳をピクピクと動かしてしまう。水面で揺れる月を目指して、私は歩き出した。

泉の中心で脚を止める。夜空を見上げると、紫色の光が眩しくて目を閉じてしまいそう。

私は泉の水を両手で掬い取ると、頭の上からそれを落とした。髪を濡らし、服を湿らせ、大腿部まで伝わっていく。衣装が体に張り付くのが分かる。

挙式を前にしたエルフの花嫁が身を清めるために行う伝統の儀式。月が空から姿を消すまで、何回も繰り返していく。

「神秘的なシンビジウムちゃんも可愛いねえ」

後方から聞こえる人物の声に私は驚いた。

儀式を中断し振り返ると、森の外からやってきたお姫様が泉のほとりに立っている。

「デンドロビウム様、どうしてここに……」

儀式中は私以外この泉に近付いてはいけないことになっている。そもそもお姫様は監視の目によって離れから出られないはずだ。

「あのエルフちゃんとは仲良くなったから、お願いをしたら外に出してくれたのよ」

監視の村人を懐柔したのだ、と平然と打ち明けられる。それからお姫様は「何故」という私の筆問に答えてくれた。

「あたし、今夜中にこの森を去るから、シンビジウムちゃんに伝えておこうと思って」

「そうなんですか……」

離れ離れになるということを教えられて少し寂しい気持ちになる。

「シンビジウムちゃん、結婚するの嫌でしょ？」

泉のほとりで膝を折ったお姫様は水遊びを始めた。

「見ていれば分かるよ。納得していないって顔してる。今はあたし以外誰も聞いていないから、不満を漏らしても損はしないんじゃない？」

あたしはすぐにこの森から出ていくし、とお姫様に言われる。

唆されたから、というわけでもないが私は話すことにした。今日の昼、初めて面会した、結婚の相手となる男性について。

「年下の男の子と結婚するとかありえなくないですか⁉」

お姫様は盛大に笑った。

「あはははははは」

大きく口を開き、お腹を抱えるようにして大笑する。こんなにも清々しく笑われると見ているこちらが恥ずかしくなってしまう。

一頻り笑い終えたお姫様は立ち上がって私を見据えた。
「そっかー、シンビジウムちゃんは年上の男性が好みなのかあ」
「そういうことじゃ、」
ない、とは言えない。
言わなければよかったと後悔するが、今さら後の祭りだ。
「やっぱり面白いなあ。シンビジウムちゃんは……決めた」
お姫様はその綺麗な両脚を泉の中に入れる。履物が濡れることも気にしないといった様子で私の方へ歩み寄ってくる。
神聖な泉へ土足で踏み込んできたことに怒りが湧き上がってくるが、それ以上にこちらへ近付いてくるお姫様から目が離せなかった。
「あたしが決めた。今、決めた。誰にも覆させない。誰にも渡さない」
「何を、決めたんですか……？」
嫌な予感がする。訊くんじゃなかった。だけどやはり遅かった。
お姫様は宝石のような瞳に私の顔を映して口を動かす。
「貴女を、あたしのものにする」
水で濡れている私の背中に寒気が走った。冷気じゃない。身の危険を感じた反応だ。
お姫様の右手が私の方へ伸びる。思わず仰け反ってしまったが、水に足を取られて体勢を崩してしまう。お姫様の右手が私の肩を掴む。
逃げられなくなった私に、お姫様の顔が近付く。
そのまま唇を押し付けられた。反対側の手で頭を動かせないようにされてしまう。
甘い水分が口の中に入ってくる。
呼吸ができない。次第に息が苦しくなってゆき、思わずお姫様から注がれた液体を飲み込んでしまった。
「マーキングしちゃった」
両手を放された体は、泉の中で尻餅をついてしまう。
「こ、口内が穢された……！」
口付けなんて十年以上寝食を共にした男女にのみ許される禁忌の所業。私は大慌てで泉の水で口をすすぎ浄化しようとする。
「そういうことされると傷付いちゃうんだけどなあ」
しゃがみこんだ私の体がお姫様の腕によって小脇に抱えられてしまう。
「えっ、えっ？　えっ!?」と動揺する私。じたばたしてもお姫様は放してくれない。
「意外と力持ちでしょ」
お姫様の言う通り、彼女の細腕からは想像できない膂力で捕まえられている。
「お前たち、何をしている！」
泉のほとりから新しい人物の声が聞こえた。お姫様の動きに合わせて視界が動く。

エルフの戦士だ。離れから消息を絶ったお姫様を捜しに来たのだろうか。靴を脱ぎ泉の中に入ろうとしている。
「シンビジウムちゃん、魔法を撃って」
「え？」
「撃たないと貴女の首を捩じ切るわよ」
そう言って、もう一方の手が私の首に添えられる。「ひっ」と命の危機を感じ取り、言われるがまま詠唱を開始した。完成した魔法をエルフの戦士に向けて飛ばす。
彼女の足元で水面が爆ぜた。舞い上がった水飛沫が彼女の姿を隠してしまう。
お姫様は身体を反転させ、泉の中を駆け出した。当然、私はお姫様に抱えられたままだ。
僅かな時間で泉から飛び出し、韋駄天のごとき速度で森の中を駆け抜けていく。
「同胞に向けて魔法を放ってしまいました……」
お姫様にそうするよう命じられたとはいえ、自分の行いに
「もうすぐ森を抜けるよ」
お姫様の言葉に反応して顔を振り上げる。彼女の言う通り、あっという間に森の端まで辿り着いていた。
「あの、私、森の外に出たことがなくて」
小さい頃から母親に言い聞かせられてきたことは、大きくなっても体に残ってしまう。
「不安なんだ、じゃあ驚くかもしれないね」
そう言ったお姫様と一緒に森の外に抜け出した。
初めて外の世界を目にした私は、眩しいと感じた。木の葉に遮られない月の光はこんなに輝いているのかと。お姫さまが言った通り、両目を見開いて驚きを声に出せないでいる。
「あ、デンドロビウムだ」
「お姫様が帰ってきた！」
外の世界は森のある場所と比べて一段低い地形となっていた。眼下に広がる地面で人間と小人族の少女がこちらを見上げている。
「エーデルワイス、レモン。新しい仲間を連れてきたよ！」
彼女らに向けて、私は小さく手を振った。

拝啓、お母様。
私はお姫様に誘拐されてしまいました。
だけど心配しないでください。
冒険者になった私は、ダンジョンの中でモンスターに向けて盛大に魔法を放っています。
「あ、デルフィニウム王子様だ。頭撫でさせて」
「なのです!?」